



みんな村通信 vol.1

～成田周辺農村への架け橋を作ります～



こんにちは。みんなの農村ネットワーク 片岡です。今年で12年目となる「食と命の教室」へようこそ！高柳さんのお話とはまた違ったメッセージをお届け出来ればと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

■「生きること」とは、ご縁と共に「生活すること」

第1回目の通信は、私の自己紹介を兼ねた経験談を書きますね。私は十数年前から農村生活に足を踏み入れたのですが、それまでは1年360日、1日16時間ぐらい働くバリバリの企業戦士でした。リーマンショックのあった2008年の秋に病気で会社を1週間ほど休むことになり、たまたま家にあった「半農半Xの種を播く」という本を見て、ぶらりと千葉県鴨川市にある「鴨川自然王国」や、いすみ市の「ブラウズ・フィールド」に出かけてみました。そこで鴨川を代表する林良樹さん、マクロビ界では有名な中島デコさんに出会い、自分の生活とはまるで違い、想像もしたことが無い人、生き方に「こんな人達がいるんだ！」と衝撃を受けたのを今でも懐かしく思います。そこで初めて素足で田んぼに入り、玄米のご飯を食べ、なんだかとても良い気分になって帰ってきました。

それから週末になると各地を訪ね歩くことになりました。埼玉県小川町の有機農業界を代表していた故・金子さん、神崎町の不耕起栽培の田んぼ、鴨川自然王国の「里山帰農塾」という合宿や林良樹さんの家に泊り「長老の話を聞く会」で神社や伝統に根ざして生きている方々と触れあいました。小学生の高学年の頃から漠然と「生きることは何なんだろう？」と疑問を持ち、「空いた時間を埋める」という感じで生きてきましたが農村の暮らしに触れることで、「人はご縁によって生きている。そして生活をきちんとすることこそ生きることなんだ」ということに気づいたのです。

そして翌年3月に退職し発酵で有名な千葉県神崎町近くに引っ越しました。それから紆余曲折がありましたが、原発事故をきっかけに「子供たちに対し大人として責任ある生き方をする」と決め、「みんなの農村ネットワーク」を立ち上げました。

自分で畑をし、農家さん達と過ごしていると「自然の流れに合わせて生活すること」「地域の繋がりやご縁で生きること」が人間らしい豊かな生き方なんだと気づきました。会社の目標や誰かの意図に従って生きていくのは、どこかで無理をしているんですね。

春になればアブラナ科は菜花をつけ、夏は体を冷やしてくれるキュウリなどの野菜が実ります。秋は冬に向けて沢山の収穫物がとれますし、冬は味噌やたくあんなど発酵食品や貯蔵したもので乗り切る。そういった自然の流れに合わせて暮らすは、人間にとっても無理が無く心地良いものです。

「生きることは生活すること」。そんなことがまだまだ日本の農村にはわずかながら残っています。この教室では、その生活体験を少しでもして頂き、何かしらの良いきっかけになれば良いな～と思っています。

■今の時期の畑作業



3月に向けて、畑の準備を整える



今の時期は畑の草取りや土作りが中心です。プロは人参やミニトマトなどの種まき、ジャガイモの種イモの植え付けをしますが、家庭菜園レベルでは3月からが良いと思います。元肥えなどを入れて土作りをしたり、年越しで育てているニンニクなどは根が動き始めますので早めに草取りをしておきましょう。そして「今年はどこにどんな野菜を作ろうかな？」といった作付けを考えるのも今の時期の仕事（楽しみ？）ですよ。

ということで、家庭菜園の本を読んだり、畑が無い方はプランターで何を自分で育て食べてみたいか、色々考えてみましょう♪

■今月のお勧め：ヘレナ・ノーバークニホッジさんの著作

「懐かしい未来 ラダックから学ぶ」、「幸せの経済学」

ヘレナさんは私が尊敬する人物の1人であり、私が「地域に根ざして生きる」と決意したのもヘレナさんの影響が大きいです。大きな問題となっている地球温暖化、コロナの根本原因の1つがグローバル化ですが、そのグローバル化が進む前は「豊かさの基準」が違っていました。何十年も外国人立ち入り禁止であったヒマラヤの辺境にあるラダックに入った西欧人のヘレナさんは、物質的な豊かさは無く、水や食べ物も限られている厳しい環境のラダックの住民が、誰もが優しく助け合い慎ましくも「貧困」「犯罪」が無く幸せに暮らしている姿に感動を覚えました。

ところが、経済のグローバル化はラダックの伝統的な生活、文化、自然との関わり、環境、人々のアイデンティティを破壊してきました。貨幣経済、消費文化の流入により「私達には何も無いんだ」と自らを貧困者として位置づけるようになってしまいました。同様なことがアジア・アフリカでも進行しています。

ヘレナさんはそのような問題を40年以上に渡って研究し、ローカリゼーション＝「地域で経済を回し、地域の生活を強めていく」ことこそが代替モデルになると提唱し、また実際にグローバリゼーションに飲み込まれていきそうな地域に入りこみ、農業や環境を持続可能な形で続けるための様々なローカリゼーション運動を促進し、世界的な評価を得ています。

特に、1975年にインドのラダック地方に初めて足を踏み入れた外国人としてその生活を記した著書「ラダック懐かしい未来（Ancient Futures）」は世界40カ国で翻訳されていて、読み応えはありますがお勧めです。ラダックのことを良く知ると、より「幸せ」についてわかるとと思います。映画「幸せの経済学」はさらにお勧めです。



ヘレナさんは「地域の力を取り戻すローカリゼーションの促進が、切り離されてしまった人と人、人と自然とのつながりを取り戻し、地域社会の絆を強めていく」と語ります。「行き過ぎたグローバル経済から脱却し、持続可能で幸せな暮らしをどう作っていくべきなのか。そのヒントは日本の伝統文化の中にもあるのではないのでしょうか？」と言います。とても勇気づけられる言葉ですね。